

発熱は、日常でもっとも出会うことの多い身体の異常です。

お子さんが発熱したら、まず前回勉強した「小児科の三角形 ABC」をチェックしましょう。復習になりますが、特に「A=外観」(図 1)の5項目が大切です。これだけでも判定する習慣つけましょう。このうち、ひとつでも出来ない項目があれば注意でしたね。さて今回は、発熱に対する考え方を、もう少し具体的に勉強します。

## 第二回 発熱の考え方

### 1. 発熱の種類

発熱には、大まかに云うと下記の2つがあります。

- ① 感染症による発熱
- ② 感染症以外による発熱



日常で見られる発熱の多くは①で、ウイルス、細菌、マイコプラズマなどが身体に侵入して起こります。これらの病原体と戦う意味も含めて、身体が反応して発熱します。よく耳にする「突発性発疹症」もウイルス感染です。②にはリウマチ性疾患、膠原病、悪性腫瘍など複雑で稀な疾患も含まれます。②のうち、比較的頻度の高いものとして「川崎病」があります。

### 2. 受診のタイミング

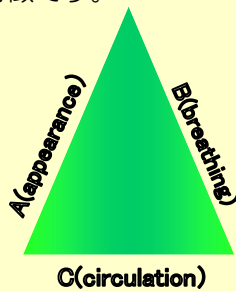
前掲のように、「小児科の三角形 ABC」のチェックは常に重要です。良くない項目があれば、発熱当日や夜間でも受診が推奨されます。

さて、一般的な受診のタイミングは、「ABC」が保たれている場合でも「発熱3日目、5日目の受診を心がける」と覚えてください。特に発熱5日目は重要です。発熱5日目になると、合併症(肺炎や、その他の重症感染症)を起こしていないか調べたり、感染症以外の発熱の可能性も考え始める時期になります。

図1 小児科の三角形ABCのA (appearance) 外観

全体の様子(外観)を観察します。  
以下の項目はお子さんの様子が良い時の特徴です。  
これらが、すべて出来ていれば安心です。

- ①自分で動ける、座れる
- ②周りの様子に興味を示す、反応する
- ③あやせば落ち着く、泣き止む
- ④目が合う、視線がしっかりしている
- ⑤会話が出来る、泣き声に力がある



ER magazine vol.4, 493, 2007 より改変

### 3. 小児の特徴=変化が速い

子供の様子は毎日変化します。小児の特徴は変化が速いことです。「発熱3日目、5日目の受診」というのは、その日まで我慢しなさいという意味ではありません。経過中に「ABC」の悪化があった場合は、すぐに受診すべきです。例えば、発熱当日は元気で「ABC」が良好でも、発熱2日目に「ABC」が悪く感じたら、3日目まで待つ必要はないのです。

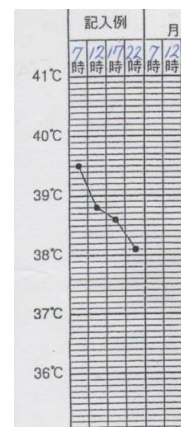
### 4. 発熱を記録する

発熱の経過を正しく記録することで、適切なタイミングで検査を受けたり、逆に不要な検査を避けたりすることが出来ます。記録のコツは、毎日定時(同じ時刻)に熱を測定することです。(図 2)。毎日の発熱のピーク経過が、病勢の変化を表してくれます。発熱の記録は受診時に見せてもらえると、診療にとっても役立ちます。



### 5. 3か月未満の赤ちゃんの発熱

3か月未満の乳児では、発熱の原因が重症細菌感染症(SBI)であることが、年長児に比べて多いと云われます。ですから、この月齢の乳児の発熱は別格で、「小児科の三角形 ABC」に拘わらず受診するのが原則です。SBI の代表は、細菌性髄膜炎や尿路感染症です。細菌性髄膜炎から赤ちゃんを守るために、ヒブワクチンや肺炎球菌ワクチンが生まれたのはご存知の通りです。



(図 2) 発熱記録のグラフの雛形